# 乳幼児教育環境の創造プロセスにおける 「水平―垂直」のモチーフ

― お茶の水女子大学附属いずみナーサリーの保育カリキュラム生成 ―

浜 口 順 子

### 1. はじめに

本論では、平成 14 (2002) 年にお茶の水女子大学内に設置されたいずみ保育所=現在の「お茶の水女子大学附属いずみナーサリー」における保育の質向上を目的とした試みを省察し、特にその保育カリキュラム生成のプロセスと成果を俯瞰した際に見出される一つのモチーフに着目し、短期的な保育理解・カリキュラム構築と長期的な保育計画・見通しとが相互に織りなされていることを考察する。すなわち、従来のカリキュラム論において二項対立的にとらえられがちであるところの保育者の意図と子どもの自発性とが、環境(教材・遊具や保育的援助)構成において可視化された保育カリキュラムとして一体的に実現されることを示す作業概念として「モチーフ」を提案したい。

いずみナーサリーは学内の教職員・学生の 0~2 歳の子どもを保育する、定員 26 名程度の小規模な認可外保育所である。しかし、当然のことながら、保育の質の確保・向上のために、日本の保育所保育の内容に関するガイドラインである保育所保育指針にかなった保育・教育が日々実施されている。保育所保育指針は、平成 20(2008)年に大幅な改訂がなされ、はじめて厚生労働大臣による告知となった(これまでは局長通知レベルの文書であった)。これは「保育所の役割と機能が広く社会的に重要なものとして認められ、それ故の責任が大きくなった証し」(保育所保育指針解説書)でもあろうが、財政改革による規制緩和の一環で幼保一体化が進められる中、文部科学大臣告示文書である「幼稚園教育要領」と同等に、保育・幼児教育施設にかかる保育の質の担保を義務化した結果とみることができる。また、これまで保育所保育に関する公式文書において「教育」という用語は、保育内容にかんする事柄以外ではほとんど使われなかったが、今回の改訂で「養護と教育の一体化」が強調されるようになった。またこれまでの「保育計画」という用語は「保育課程」となり、保小連携のために「保育要録」が小学校に送付されることが義務付けられるなど、「教育」の場としての保育所という位置づけが明瞭化された。

一般的に大学内に設置される保育所が外部民間団体に委託運営されるケースの多い中で、いずみナーサリーは、主にお茶の水女子大学の運営資金と保護者が納付する保育料で運営される自立的組織である。人材確保も質の保証にかかる研究もすべて大学と保育士が共同して取り組むのが原則である。保育士の間でも、ナーサリーを単なる「子どもを預かる場所」ではなく「教育研究を行う場」であるという認識は当初から明確であり、子どもの午睡時間などを使って保育士たち自身による自主的な園内研究が創設当初から進められてきた(巻末に示した「文献」中の報告集等に成果が随時発表されてき

ている)。また平成 16(2004)年末にいずみナーサリーは、国立大学法人の学内保育所として唯一附属学校部の所属となったため、福利厚生目的にとどまらない「大学の教育研究に資する」という使命を公的にも担うようになった。その流れの中で、平成 18(2006)年度~平成 21(2009)年度の特別経費「幼保の発達を見通したカリキュラム開発」事業(現在この事業は特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業=ECCELLに継承されている。平成 22~26 年度予定)により、大学の保育・幼児教育学を専門とする教員との園内研究会が定期的に(ほぼ月1回)行われるようになり、その都度日々の保育を遂行する上で課題となっていることをテーマとして採りあげ話し合いが行われ、保育士の自発的な保育カリキュラム形成過程に大学が伴走する関係を育ててきた。ここ数年ナーサリーの保育環境はめざましく変わってきたという著者の印象がある。それはポジティブな感触のものであるが、本論では保育環境としてのナーサリーの変化の意味を問うこととしたい。

## 2. 目 的

いずみナーサリーは通常の保育所と異なり、保護者のほとんどが女性研究者や学生であるため、その研究・教育の時間に合わせて、週1日から週5日の通所日数自由選択や一時保育の受け入れを行い、また、1日の保育時間もフレキシブルに決定できる体制をとっている。そのため、個々の子ども・保護者の多様なニーズに応えつつ、そこに一貫した保育の質を保証するため、独自の保育カリキュラム・方法を探求する必要がある。したがって、そこでは、一人一人の子どもの育ちを支えるカリキュラム(学び/育ちの履歴)、仲間と共に流れのある生活を保障するカリキュラム(従来の日案・週案等に代わる活動のシークエンス)の両軸から保育の計画・実践が構想されている。

いずみナーサリー創設以来その保育の質の改善に向けて努力されてきた足跡は保育士相互の協同研究の成果であるが、本論では大学が研究協力者としてそこに関与するようになった平成 18 (2006) 年度以降の変化に焦点をあてて考察する。今回は(1)ガラス絵の実践、(2)大型遊具の導入、(3)午睡の援助等、園内研究会でそれぞれ複数回取り上げられた主題を中心に、その展開の特質を「水平から垂直へ」という一つのモチーフとして読み解き、いずみナーサリーという一保育所の保育カリキュラム生成のプロセスの特質を明らかにする。それによって、 $0\sim2$  歳児の子どもの発達・学びと保育者の意図性とが無理なく融和しながら生成される保育課程の可能性が示唆されるだろう。

## 3. 方 法

いずみナーサリーにおける保育の質的変化を特徴付けるトピックから、その保育カリキュラムの特質を物語るモチーフを現象学的視点から見定め、保育者が日常的に生成するデイリープログラム(刻々と同僚と共有されるレベルのもの)の志向性と、ナーサリーが長期的に目指す保育援助の方向性との一貫性・循環性を見通すキーコンセプトとして活用する。そのために、ナーサリーと大学間の保育研究会(園内研究会)の資料(平成 18~23 年)をはじめ、いずみナーサリーの保育環境およびその質に関する研究資料・報告集等の文献を検討した。また平成 18(2006)年以降著者が「保育臨床実習」(生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座の専門科目で、保育現場での観察と省察を行う)という授業における観察や自主訪問により行なってきた参加観察の記録と全体的印象から、モチーフを焦点化した。

# 4. モチーフとトピックとの関係性

本論で扱うトピックとして保育研究会で繰り返し話し合いの対象となったテーマの中から「ガラス 絵」「大型遊具」「午睡の補助」を選択した。そこに通底するモチーフとして「水平性と垂直性を往還 するイメージ」を仮定し、上の3つのトピックにおいて典型的に記述されうるものと考えた。

教育課程を指すカリキュラムという言葉は、「走路」「経過」等を意味するラテン語を語源としており、現代におけるその教育学的意味は一義的ではなく、「一連の教育計画全体」を意味する場合もあれば「学習の機会の総体」を意味する場合もある(磯部 2010)。1990 年代から乳幼児教育の質的向上は国際的な課題となっており、OECD(経済協力開発機構)の教育委員会は ECEC(乳幼児期の教育とケア)調査を 1998 年に開始している。34 の先進国が ECEC への投資を、女性の労働市場への参入、家庭における養育責任と仕事の両立、人口問題、子どものウェルビーイングに向けて必要な経済政策として捉えており、各国のよりよい乳幼児教育カリキュラム研究は近年拍車をかけている(OECD、2006)。その中で、イタリアのレッジョ・エミリア市の保育実践を機とした乳幼児教育カリキュラム研究は広く欧米、そして日本にも波及し「プロジェクトアプローチ」として研究されている。子どもの自発性と大人側の計画性・指導性という教育課程をめぐる旧来の 2 項対立を克服するプログラムになる可能性があると考えられているからである。実践をとおして当事者たち(子どもと保育者を中心に保護者・地域も参加する)が保育の質を高めていく作業としての記録、省察、計画が循環的に生活の中に組み込まれるプロセスじたいが、イマージェントカリキュラム(生成型カリキュラム)という保育課程と考えられるになってきた。

いずみナーサリーの設立以来の試行錯誤的カリキュラム構築の過程も「生成」という名にふさわしい展開をしてきたと振り返ることができると考える。これまでの園内研究に提出された研究テーマを概観(抜粋)すると下記のとおりである。

## ◆平成 18 (2006) 年度

- 4月 時間担当制(場面的シフト制)とクラス担任制の試行。
- 7月 手作りおやつ導入。
- 9月 保育士の書いた子どもの記録を読み合う研究会はじめる(個別の記録をかいてみよう, 主観と客観を考える)
- •10月 保育サポーター登録を始める条件について。
- ・11月 他の保育園の視察報告。
- •12月 室内遊びを考える。保護者への連絡体制について調査。
- ・1月 行事と日常的保育の関係について。
- ・2月 甘やかしってなに。午前の保育と午後の保育について。
- ・3月 食べられない子の研究。

### ◆平成 19 (2007) 年度

- 5月 個別記録票の試行。子ども個別の月間個別計画の検討。
- ・9月 午睡と再眠について(場所,食事,体制,個人差)。
- •12月 絵の具遊びの中で(4月からの取り組みの振り返り)。イーゼル使用,絵の具の濃度,

小麦粉粘土の並行などの試み。絵を描くことの意味、環境の準備のしかた、繰り返す意味などについて、質的検討を行う。

・3月 子どもを大きなまとまりの中で考えることと、その子の今を見つめること。

#### ◆平成 20 (2008) 年度

- ・5月~7月 睡眠について学習。子ども個別の午睡特徴を検討。
- ・ 9月 透明なガラスに絵を描こう。\*クリアボード開発計画
- 1月 保育室のレイアウトを検討する(棚,パーテーション,コーナー等)。
- 3月 食育プロジェクトによる「わくわくモーモースクール」への参加。保護者支援とは。 「衝立て」の保育的意味。

#### ◆平成 21 (2009) 年度

- ・11月 保育課程(案)の検討。改定版保育所保育指針および附属幼稚園・小学校の連携プログラムの方向性を踏まえる。
- ・2月 2歳児の保育環境と遊びの考察。保護者支援の行事のふりかえり。

## ◆平成22 (2010) 年度

- 7月 野菜を育てる・食べる。
- ・10月 環境を考える。大型遊具。"もの"とのかかわり。

園内研究会当初は日々の記録の記述方法についての検討が重ねられ、保護者との連絡カードや保育者同士の連絡シート、各自の保育記録の検討などが頻繁に話題になり、研究の基礎的条件ともなる記録の書き方・共有・相互活用方法などが検討された。こうした研究体制の基礎を固めつつ、徐々に遊び、食、睡眠、1日の活動の流れ、行事、そして個と集団相互に目をやりながら保育的質を向上させる保育内容や環境の検討へとテーマが深まっていく経過が見てとれるだろう。

いずみナーサリーの保育の特色は、小規模性、個々に応じたフレキシブルな保育時間、大学文化に親和的な保護者の性向など様々である。そこで目指されている保育の背景には、保育室環境を一見すればわかるのだが、保護者や見学者すなわち大人にとって居心地のいいデザインがひいては子どもの安らぐ空間になるという発想がある。商業的な、えてして大人の子ども観を押し付けるようなものは置かれておらず、良質で自然の素材をつかった遊具や、日々の保育の中から考案された保育者手作りの教材がおかれている。平成17(2005)年に、附属幼稚園内から現在の場所へ移転した後のナーサリーは(もともと職員寮の談話室と管理人室を改造しているため)、玄関口は狭く一般家庭のそれのようであり、中の保育室も和室1部屋を含めて白木が基調の、落ち着いた家庭的な雰囲気を呈しており、見学者の多くはこの印象をまず口にする。

保育援助のスタンスとしては、子どもの視点に立ち子どものやりたいと思うことを支えるという姿勢が、ごく自然に保育者の動きとなっている。したがって保育者の身体的構えは物理的にも低い場合が多く、子どもの姿勢に応じて合わせていく傾向が強い。背伸びする子どもがいれば、自分も一旦体を低くして伸びようとするような重ね合わせる身体行動が自然に見受けられる。

そのスタンスは、乳児期から幼児期の認知発達を支える態度にも通じていて、たとえば梅雨の季節にアジサイの花といかに出合うかというプログラムにおいても、絵本などで二次元のアジサイの絵や写真を示すことが実体験よりも先行しないように、散歩で実際のアジサイの花を見たり触れたりしてから、保育室にアジサイの絵を飾るなどするという。子どもが主体としてまず自分の生活世界に住ま

う経験を大切にしながら、新しい環境に出会う工夫がなされているのである。

子どもの身体が環境と出会う傍らで、ナーサリーの保育者もまた身体的に子どもと体験を重ねあわせて世界に出会いなおしているという印象がある。自分ならば何を面白いと感じるか、美しいと感じるか、何に驚くだろうか…ということを常に問い、そこから、子どもの感じているものを洞察しながらその感動を共有して言葉にしたり、より豊かな体験を導き出すヒントを構想し提示しようという態度が生じたりする。また、子どもの感動や集中度を保育者は客観的に評価するのではなく、自らの身体性を重ねて受け止める。このとき、子どもは大切な大人に認められた自己存在を大切におもい、自らの存在感に自信をもち、世界への肯定的な感情をそだて、共存を志向する。

こうした保育者の姿勢は、いわゆる「真・善・美」という人間が有史以来追求してきた文化的価値を実現させようとするものでもある。しかし乳幼児期の子どもは、真・善・美として分化された価値を経験するわけではない。人生の初期において乳幼児はすでに「きれい」とか完璧なるもの(美)への憧憬をもち、面白さや不思議さ(真)にひかれ、それを人と共有すること(善)を願うのではないか。面白いものを「かっこいい」と憧れ、自分の技能を一生懸命に磨き、「すごいなあ」と認められる経験の中で、真・美と善が総合的な心地よさとして身体感覚となり表現されるのであろう。ナーサリーの保育士はきれいなもの、面白いものをいとおしみ常にアイディアをだしては保育環境を作り変えている。また子どもがそのような保育環境の中で味わう感興を共に享有するあり方に、いずみナーサリーの特色があると考える。その姿勢が保育者をして「自然に」次の保育計画づくりに向かわせる。本論でトピックとして採りあげるガラス絵活動や大型遊具導入もそうして生成されたカリキュラムであった。

ガラス絵と大型遊具の実現には、それぞれの萌芽的アイディアが誕生した時期を入れれば3年以上の時間が費やされている。トピックとしては何度も登場する形で長続きしているのだが、そこにモチーフが一貫していることが重要であると筆者は考えた。「好きだから」「集中してやるから」ということだけでなく、子どもが集中する遊びの目指すイメージが、保育者の中長期的な保育計画ひいては生涯発達への見通しを支えるイメージと重なり融合する中で、それがモチーフとなって具体的な保育課程として実現されていく。そのような保育者と子どもの関係性を実現することが生成的カリキュラムの条件となる。

「水平一垂直」というモチーフには、子どもが這ってから立ち上がる身体性の発達的ダイナミズムが現れており、しかもそれに伴う子どもの空間経験の変化、そしてそこに寄り添いながら子どもの成長を、個々の子どもに十分具体的に豊かな意味ある経験として実現させたいと願い保育を行う保育者の保育観(ねらい、目標)とが重なって表されている。子どもの成長を長期的に見通し、子どもの成長のモチーフと大人の側の保育的援助のモチーフとの融合からカリキュラムを考えることは、現在のプロジェクトアプローチ研究におけるプロジェクトの立ち上がり過程をミクロ的かつ全体的な視点から読み解く上でも不可決であると考える。

## 5. トピックの考察

#### 5.1 ガラス絵に絵を描く

上の園内研究会のテーマメモによると、2007 (平成19) 年度から絵を描く活動についての報告が始まり、どうすれば充実した絵画表現活動を援助できるかが話し合われるようになっていた。

子どもの表現活動を豊かにしたいという意図のもとに、乳幼児が使いやすい絵の具やクレヨンと紙を机上に用意したが、意外に描画活動が促進されないという報告があった。その際話し合われた課題は次のようなことであった。「そもそも絵は机の上で描くとは限らないのではないか。画家はイーゼルにキャンバスを置いて絵を描く。乳幼児にとって、机の前に座り(立ち)、腕を水平面に沿って動かすということが難しいかもしれない。殴り書きの初期に、空(くう)を描く部分が少なくないことからもそれはわかる」という反省に立ち、 $0\sim2$ 歳の子どもが絵を描きたくなる環境について検討された。これが、ガラス絵の生まれる一つの機縁であった。この後、ガラス絵遊びに発展していくプロセスは次のような流れであった。

「昨年度から平面に描くことに加えて、手作りのイーゼル(縦 130 cm×横 180 cm)に、垂直方面への立位姿勢での描画を取り入れてきた。そこには高いところへ向かって腕を伸ばしたり背伸びをしようとしたりと、身体と表現が一体となって描く姿が見られた。

冬のある日、保育室の窓ガラスに丸や四角・三角などの半透明のステンドグラスシートを貼って形遊びをしていたとき、ステンドグラスシートを顔にかざしてシート越しに見える色の世界にひたったり、窓に貼った色の配列や重なり具合を楽しむ姿があった。光を通すことで、色の世界は柔らかくかつ奥深いものになる。

上記の2点から透明なイーゼルに絵を描くことができないものかとナーサリーと大学で共同開催している研究会で話を進めていくことになった。

最初はアクリルボードで水平にも垂直にもなるイーゼルを作成する方向で検討したが、安全性や安定性に加えて、子どもが描きたくなる形状(平面/立体)となると、なかなか難しい。そこでまずは窓ガラスに描いてみて、実際に透明なものに描くことで、子どもたちの姿から考えていこうということになった。ガラス絵の始まりである。ガラス絵の場所は中庭に面した大きな窓とした。」(中澤・佐治、2010)

中庭と保育室の間に挟まれたガラス戸が、絵の具の準備や後片付けをするのに適していること、そして実践後には、自分や他の子どもの「作品」を鑑賞するにも適した位置だということがわかってくる。



写真1 ガラス絵を描く

この活動では、口にはいっても有害ではない保育用の絵の具が使われたが、色は3~4色、薄いパステル調の色彩で、混ぜたり重ね塗りをしても美しい色が選択されていた。絵の具を付ける道具は「タンポ」というスポンジを布でくるみ球状にしたものをフィルムケース(手で持つ部分)の先にくっつけたもので、子どもはそれでポンポンと叩いたりすべらせたりする触覚的感触も味わえる。

次の事例は、飛行機で外国出張に行く父を見送る経験をした男児Kの様子である。

「シャボン玉遊びからガラス絵が始まった日、K は下から上へ向けてポンタをスッスッと跳ね上げるような動きをしていた。保育者は『シャボン玉どこいくのかな』と言いながら楽しく下から上へ筆を動かしてみる。R も保育者と一緒に腕を伸ばして高いところへ描いていく」。(中澤・佐治(2010)の学会発表時使われたパワーポイント資料より。)

机の上での「下から上へ」の動きは、あくまでも水平な動きである。世界の上下を描くあり方は、そもそもキャンバスも上下であることが身体性にとって自然なのだと、この事例から感じることができる。飛行機で発った父親のイメージを重ねていると考えるのは、保育者の想像にすぎないかもしれないが、子どもが打ち込んで表現している下から上への活動性は、傍らにいる保育をしてその意味を問わせざるを得ないということであろう。

別の日のガラス絵の遊びは、アオムシが実際にナーサリーで孵化して蝶になるという「事件」の後に行われた。この衝撃的ともいえる体験を受けて、保育者たちはガラス絵活動に繋げるカリキュラムを構想する。ナーサリーが撮影した写真記録によると、その際には『はらべこあおむし』の絵本を読み聞かせし、その中の蝶の絵を紙に写したものをガラス戸に張り付けて「背景」のように配置していた。大きな驚きを生じさせた、しかしその神秘を言語化することはできない乳幼児たちにとって、その体験を子ども一人一人に即した意味ある経験にすること(経験化)を補助するねらいをもった活動であったと考えられる。

#### 5.2 大型遊具を導入する

いずみナーサリーの主な保育室は2つあり、1つは6畳の和室で、主に比較的月齢の低い子どもが数名過ごす部屋となっている。もう1つは、明るい細長い部屋で面積は66平方メートル、比較的月齢の高い子どもが主に過ごすフローリングの部屋である(クラス分けは、子どもの成長にあわせて年度中も変更される。1日の中に、子どもが2つの部屋を行き来して自由に遊べる時間もある)。この場所に移転した当初から、保育士間でも共同研究者間でも、大きな保育室の、水平床の広がる単調な雰囲気は保育環境として問題視されてきた。そしてなんらかの垂直方向への展開がある空間にしたいという希望がずっとあった。

広い単調な横広がりの空間に変化をつけるためには衝立て(パーテーション)を置くという比較的 簡便な解決方法があり、これはどこの乳幼児保育施設でも多く取り入れられている策である。日本では、乳幼児保育の原理として、明治時代から家庭生活との連続性の必要性が強調されているにもかか わらず、園建築では保育室がクラスルームとして作られることが多く、生活の場として1日の大半を 過ごす保育所でさえ、寝食眠が同じ空間で行われることが未だに少なくない。活動の流れをよくする ため、また多様な遊び活動が可能であるように、パーテーション(仕切り)としての衝立てをナーサリーでも使用してきた。保育用品業者の既製品や、保育士がダンボールで手作りし布で覆ったものも

ある。2008(平成 20)年,大学本館 1 階のプレイルームに置く衝立てを手作り家具の K 工房(渡辺晃男氏)に依頼して(特別経費「幼保プロジェクト」事業),材質,塗料などのハード面と,面白さや芸術性などのソフト面にも配慮された,「子どもにとって良い」ものを製作してもらったことがきっかけになり,新たにナーサリーの保育室用に保育士の思いが込められた衝立てを注文した。この衝立ては,乳児がつかまって立てば少し頭が出るほどの高さだが,その傍で這ったり座ったりしていても,隙間から向こう側が見える構造になっている。また衝立内部にはビー玉や紐など遊べるものが埋め込められ,指で動かすことができる。仕切りながらもつながっている,という感覚を味わえる環境として,衝立ては,平たい空間に変化を与え,乳幼児と大人・他の子どもとの関係形成を微妙なニュアンスを含みつつ支える遊具・家具となっている。

この衝立ての保育的成果を受けて、ナーサリーにとっては長年の夢であった、高さのある環境づくりを同じ工房と相談して実現させていくことになった。保育士が具体的なデザインも考え練りだしたものをたたき台にして、園内研究会でもいろいろな子どもの動きや成長を想定してアイディアを出しあい、それを工房の家具職人と相談を重ねて1年ほどかけて完成した。このプロセスについて保育者(私市)は次のように書いている。

「いずみナーサリーでは、子ども達が大人に見守られ主体的に遊び、人との関わりを生み出す室内空間について話し合いを重ねてきた。天井が高く広いワンフロアーのためパーテーションで仕切り、ゆったり、じっくりと遊べる環境を設定したが平面から立体へ、静から動のあそびを考えると部屋の中に高低差のある場が必要だと感じていた。それまで技巧台を組んで30cm程度の段差を設定していたが2歳児には物足りない。0歳~2歳児のどの年齢も満足でき、安全で安心して遊べる遊具はないのだろうか。既成の物を探したが見当たらず、ナーサリー独自の遊具を作ることにした」。(お茶の水女子大学いずみナーサリー、2011.1)

いずみナーサリーでは、座ることもままならない時期の子どもから、ハイハイをし、やがてはつか



写真 2 大型遊具

まり立ちして立ち上がり、歩き、そして走りまわる過程を見守る。大地の上に横たわっていた乳児が、頭をもたげ、水平面をころげまわり這いまわり、そして上方へのあこがれを持つようになるのは、二本足歩行の動物たる人間の根源的な経験の取得である。「月齢がくれば立ち上がるのは当然」と考えていては保育にならない。歩き始めの幼児が、まだ頭の上までも届かないような短い両腕をいっぱいに上に差し上げて歩くのは、こと平衡感覚をとるためだけではなく、上方(成長すること)に向かう自信と世界への信頼を体現しているのであろう。一人一人の子どもの、水平から立ち上がり垂直への伸びを求めていくあり方を、人間らしい経験として豊かに経験してほしいと保育者は願う。したがって、その目からすると、ただ水平面に広がるだけの空間は保育室として物足りなく感じる。子どもの自発性と大人(保育者)の成長への願いと具体的な援助は、二項対立的ではなく、出会い融合する。歩き始めたばかりの0歳児の子どもが大型遊具とかかわる様を保育者(中澤)は次のように記述している。

「0歳児の部屋で高低差の小さい斜面でハイハイや歩くことを十分に楽しんだ後、保育室の大型 遊具へ。最初は不安で保育者と手をつないだり、よつんばいになって上るが、繰り返し遊ぶうち に、一人で立って上り下りする。突起につま先をかけ、膝を使って慎重に下りるなどの身のこな し方を自然と体得している。」

「設計段階では0歳児が高台に上ることは想定していなかったが、体全体でよじ上る。高いところからの眺めを楽しむ」。(お茶の水女子大学いずみナーサリー、2011.4)

### 5.3 午睡との関わり

2007(平成 19)年から翌年にかけて、子どもの睡眠=午睡をいかに援助するかということが、園内研究会において何度も話題になった。一人一人違う「入眠」をどう支えるか考えるために、一人一人の睡眠の個性について記述する記録もあった。多くの場合、眠るのを嫌がって泣く子どもが数人いたことを受けて、どのような生活を保障するべきなのかが問題になっていた。これは、いずみナーサリーが利用日数選択型保育形態をとり、保護者のニーズに合わせて個々の登園時間にかなり差があることによって、問題解決が困難になっていた。子どもが気持ちよく寝付くには、ナーサリーの保育士の努力だけではどうにもならず、どうしても保護者による理解が必要だということは言うまでもない。保育士のローテーション問題から、「再眠」(起きた子どもをもう一度寝かせる)をどうするかということも話題になっていた。

ところが平成 21 (2009) 年以降,午睡の問題はいつの間にか園内研究会のテーマとされなくなった。それは,ガラス絵活動や大型遊具などの保育環境や表現活動等への関心の高まりと入れ替わったような感がある。このことについて保育士に確認したところ,「再眠」という用語を使った午睡に関する話し合いは最近行われていないとのことである。それぞれの子どもの生活のペースやその日の覚醒・健康状態によって,早く昼食をとって午睡を早くとるグループと遅いグループを分けたこと,早く起きた子どもには保育者と過ごすスペースを別に確保して過ごすようにしているからだろうとのことであった。

この変化の過程は、生活習慣とかかわる日常的保育の深部の出来事であり、著者には直接フォロー

できていない部分が大きい。しかし、子どもが眠り再び目覚めるということが、少なくとも保育者達の問題関心の的ではなくなったというのは大きな変化と言えるだろう。子どもが床にはいること、目覚めることの繰り返しは、日々の生活単位で繰り返される「水平一垂直」のモチーフである。ナーサリーの保育カリキュラムにおいてそのモチーフを内包した生活部分が、問題視されなくなったということ、子ども自身の生活ペースを重点に置いてとらえなおす(ひいては保護者の生活ペースを考慮する)ことで克服されたのであり、モチーフが具体的に実現された結果として評価されるのではないかと考える。

## 6. まとめ

平成 18 (2006) 年以降,いずみナーサリーの保育を比較的近くから観察し,園内研究会に関与してきた者として捉え得た保育の質的変化について,いくつかのトピックに通底するモチーフから考察することを試みた。モチーフは当初,質的変化の特質を説明する補助概念として,主に保育者の保育的構えに内在する中長期的な契機としてイメージされていた。

水平面から垂直面での描画活動への計画の変更、水平面上に単調に広がる保育室に高さのある常設 大型遊具(可動性あり)の設置、そして覚醒と睡眠の間にある身体の「水平一垂直」移動について考 えてきた中で、子どもの主体性の中にまず「水平一垂直」の変化を楽しむ、すなわち両方の交互的体 験を自らの成長経験に重ねて追求するモチベーションがあることが明らかになった。

それは動物進化のレベルにおいても、人間としての手の解放という意味(腕をぐるぐる動かして描くためには机上の作業には限界がある)においても、そして諸活動エネルギーの元を作り出す「動 (活動)と静 (休息)」の反復という意味においてもである。いずれも、子ども一人一人が生命性の象徴として誕生とともに携えてくるモチーフであると考えられる。

保育・教育課程を論じる際、特定の社会に必要な能力取得の技法に偏るのも問題だが、子どもの個別性重視ばかりに陥るという二極論的議論が多い。つまり子どもがいかなる人間になっていくのか、そして保育者自身もどんな人間として成長し続けるのかという視野が失われがちである。人間になるというテーマは、実は大人の保育者もまだ途上の課題なのであり、それは保育者としての専門性の発達という狭い意味の問題ではない。保育者が直接に子どもと関わり子どもにあい対するときの構えには、そこにいる子どもに応答するための個別性への配慮もさることながら、同じ人間として予想不可能な出会いや可能性に開かれる在り方が重要である。一保育施設の保育理念の変化であれ、個人的な保育者としての資質の変化であれ、その変化を動機付けているモチーフを具体的に見定め、その一貫性に着目しつつ人間学的意味を問うことを保育カリキュラムの研究方法の一つとして今後も検討していきたい。

#### 文 献

磯部裕子(2010)教育課程の理論―保育におけるカリキュラム・デザイン―,萌文書林,10

中澤智子 (2008) お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (13): いずみナーサリーの今までと これから、幼児の教育、107(1)、フレーベル館、58-63

中澤智子・佐治由美子(2010)透明なキャンヴァスで描く — 3 歳未満児の対話的保育の実践報告(1), 日本保育学会大会発表要旨集(63), 209

#### 乳幼児教育環境の創造プロセスにおける「水平―垂直」のモチーフ

- 中澤智子・私市和子(2011) M 男から生まれた表現遊び 3 歳未満児の対話的保育の実践報告(2), 日本保育学会大会発表要旨集(64), 97
- お茶の水女子大学いずみ保育所運営委員会(編)(2003)大学の中に、赤ちゃんがいる ― お茶の水女子大学いずみ保育所の役割 ― , 平成 14 年度教育改善推進費研究報告書 幼保連携カリキュラム開発の研究 ― 附属校園・大学の連携による開発の研究
- お茶の水女子大学いずみ保育所運営委員会(編)(2005)大学の中で赤ちゃんが育つ お茶の水女子大学いずみ保育所の記録 , お茶の水女子大学いずみナーサリー(報告書)
- お茶の水女子大学いずみナーサリー (2011) いずみナーサリー「大型遊具」—— 歩き始めて 上ってすべって 遊びが生まれる —— (パンフレット)
- お茶の水女子大学附属いずみナーサリー・お茶の水女子大学幼保プロジェクト(編)(2010)大学の中で、赤ちゃんが笑う 育ちにふれて大人も育つ、平成18~20年度文部科学省科学研究費・萌芽研究「次世代育成コミュニティとしての大学における乳児保育施設の意義と可能性の探究」(研究代表者:浜口順子)報告書
- お茶の水女子大学特別経費「幼保の発達を見通したカリキュラム開発」事業(2008)大学コミュニティにある保育実践と学生の学びをつなぐ 保育カリキュラム研究と保育者養成カリキュラム研究の相互的展開をめざして一、お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」(研究代表者:浜口順子)中間報告書
- お茶の水女子大学特別経費「幼保の発達を見通したカリキュラム開発」事業(2010)大学コミュニティにある保育実践と学生の学びをつなぐ 保育カリキュラム研究と保育者養成カリキュラム研究の相互的展開をめざして お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」(研究代表者: 浜口順子)最終報告書
- OECD (2006) Starting Strong II Early Childhood Education and Care -, OECD Publishing 渡辺晃男 (2011) 保育家具に携わって、幼児の教育、110-4、フレーベル館、56-61
- \*本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))助成を受けている。「大学コミュニティにおける 乳児保育の場から生成される重層的カリキュラムの開発」、研究代表者:浜口順子、研究分担者:柴坂寿子・ 佐治由美子・菊地知子、研究協力者:私市和子・中澤智子・斎藤実雪・石塚美穂子(以上4名はいずみナー サリー保育士)、江波諄子・入江礼子・杉本裕子・大戸美也子・小玉亮子